



小学校だより Vol.137

理科室からこんにちは

輝かしいノーベル賞の受賞や「リケジョ」の活躍が話題となる一方、子どもたちの理科離れが深刻とも言われています。理科を通して科学的な見方・考え方を身につけることは、子どもたちが将来よりよく生きていくためにとっても重要です。

本校の理科教育をさらに振興していくために、本年度より理科専科として石井鈴一先生にお越しいただいています。石井先生は、名古屋市教育センター指導主事、名古屋市科学館学芸課長、全国小学校理科研究大会の会場校の校長などを歴任された理科教育のエキスパートで、現在は県内の大学でも教鞭をとっていらつしやいます。

そんな石井先生にいくつか質問してみました。

Q 理科が好きになつたきっかけを教えてください。

A 子どもころの田舎の祖母の家に行くと、よく虫や魚を捕って遊んでいました。道具がないときは竹を切つて釣り竿をつくつたり、蜘蛛の糸を竹につけて虫取り網の代わりにしたりして工夫していました。自分の専門は生物なのですが、そんな日々を送るうちに自然と生物が好きになりました。



Q 理科を教えていて感じる椋山小学校の子どもたちの印象を教えてください。

A 理科的な知識が豊富です。また興味関心もあります。とても教え甲斐のある子どもたちだと思います。強いて言えば、体験的に活動した経験が少ないように感じます。自分の子ども頃のようなことをするのは難しい時代ではあります。いろいろなことを自分で考え、やってみて、その結果得た知識、即ち体験に裏付けられた知識を増やしていくとよいと思います。



Q 大学で教えていてどんなことを感じられますか。

A 大学生に小学校でどのように理科を教えたいのか教えているわけですが、改めて小学校で学習する実践をさせると、新たな発見があると言います。わかつたつもりになつていて小学生の実験ですが、大学生にとつても学ぶことは多いのだなと思えました。



Q 科学的なものの見方・考え方を養うにはどうしたいですか。

A 例えばテレビや新聞で科学的な情報に触れたとしても、多くの場合分かりやすくまとめられています。なるほどと納得しがちです。けれどももう少し深く考えてみると、疑問がたくさん出てくると思います。その疑問を自分なりに追究して、別の情報をあたってみたり、自分でやってみたりして解決しようとするのが大切です。安易に納得せずに、疑問をもつこと、疑問を解決しようとする、そういう考え方のくせをつける、とよいのではないのでしょうか。



校長 森 和久

特集 椋小の国際交流 P2、P3

委員会・部活動報告 P4 / 学期の記事 P5

学年トピックス P6~P17

PTA P18、P19 / 学期の出来事 P20

CONTENTS